

ね　　ぎ

1 予報（7月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並だった。(±) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
べと病	-	やや少	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
黒斑病・葉枯病	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年並だった。(±) (2) 7月の降水量はほぼ平年並の予報。(±)
ネギコガ	-	並	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 7月の気温は高い予報。(＋)
ネギハモグリバエ	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや高かったが、被害程度は平年より低かった。(±) (2) 7月の気温は高い予報。(＋)
ネギアザミウマ	-	やや多	(1) 6月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害程度ともに平年並だった。(±) (2) 7月の気温は高い予報。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める。
- (2) 茎葉散布は散布ムラが生じないように畝の両側から丁寧に行う。
- (3) 発生源となる被害残渣や雑草等を圃場から持ち出して処分する。
- (4) 薬剤選択にあたっては、耐性菌や抵抗性害虫の出現を回避するために、同一系統の薬剤を連用せずに、異系統の薬剤をローテーションで使用する。特に、Q o I 剤は耐性菌の発生リスクが高いので年2回以内の使用とする。

【べと病】

- (1) 降雨が続くと発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) べと病の病斑には葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）が二次的に感染するため、予防散布に努める。

【さび病、黒斑病、葉枯病】

- (1) 降雨が続くとこれらの病害の発生が助長されるので、定期的な防除を行う。
- (2) 肥料切れすると発病しやすいので、適切な肥培管理に努める。
- (3) 葉枯病（褐色斑点病斑）は、ネギハモグリバエの食害痕上に二次的に感染している事例が確認されているため、栽培期間を通してネギハモグリバエの防除を徹底する（R 2-2病害虫防除技術情報参照）。

【ネギコガ】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う。

【ネギハモグリバエ】

- (1) 圃場をよく観察し、舐食痕および被害の早期発見に努め、被害が確認された場合は薬剤散布を行う（図1）。

【ネギアザミウマ】

- (1) 圃場をよく観察し、被害の早期発見に努める (図2)。
- (2) 高温条件下では世代の経過が早いため (25℃では16~17日程度で1世代経過)、散布間隔が空かないよう注意する。



図1 ネギハモグリバエによる舐食痕(左)および被害(右)



図2 ネギアザミウマによる被害